

野村純一著

『昔話の森』

石井正己

表題と副題とから整然と構成されているが、表題に話の内容を示し、副題には論じた事柄の主題や視点、問題点を示す。「目次」は、この本の構造そのものをよく示した見取り図となっている。一章ずつ、検討してみよう。

すぐれた本の条件とは、いったい何なのだ

な労力だったと想像される。

ろうか。それは一言で言えば、「研究」という制度の中にはあっても、内容と不即不離の文体

なまづ「目次」を示しておくと、次のようになる。

序章

昔話の森 「小さ子」の発見

1章

「桃太郎」の原型 山中の異童子

2章

大きな魚の背に乗ってきた男 説

3章

話集と口承世界 ほととぎすと兄弟

4章

鳥になった子 どもたちへの鎮魂

5章

風の嫁入り 天竺・震旦・本朝に わたる伝承

6章

「田螺の歌」を巡って、話が改変される時

7章

老大「ズルタンじいさん」 グリムの行方

8章

あべこべ話と大法螺話 笑話の氏 素姓

この本での姿勢は、昔話を読むことへの、尽きぬ興味を語ってくれる。そのために、昔話を知らない人でもすっと入ってゆけるように、これまでの論文を改めているが、それは大変

具体的には柳田国男が認識してきたプログラムの構成を示してみせる。記述にあたって、特に話型や重要な用語を太字で示すが、それは、この本の末尾に置かれた「主要話型・用語解説」と照應している。だが、そこに示されたプログラムはもう一度検討される必要がある、と批判してゆく。具体的には、神話に対する民間説話、とりわけ昔話を「対極的な位置にあるもの」とみなす理論が提示される。神々の物語としての神話ではなく、常民の物語としての昔話、その世界が述べられる。

以下の八章に及ぶ各論は、新たな昔話像を提示してゆく試みになっている。

1章の「桃太郎」は、柳田が最も注目した話だ。柳田は、西日本に広がる「寝太郎」型の話を、「変例」と見たが、これを退ける。その眼目は、「元來が『小さ子』の『力太郎』型の話が支配的であったところに、西の方から

新來の「桃太郎」が移入してきた」(四七頁)という点にある。末尾に提示した「桃太郎力を持ち」を示す草双紙や絵巻は、その読みを補強する。説得力のある問題提示であり、我々が作りあげてしまつた話型という概念そのものを越えようとする点でも、魅力がある。冒頭に引用する「桃ノ子太郎」(三五頁)は、もともと小学生の作文だった。その点、資料の吟味が必要になろう。

2章の「大きな魚の背に乗ってきた男」は、『宇治拾遺物語』に始まり、「鮎の大助」「饅に助けられた話」と南下し、台湾の事例をも挙げて、説話の起源の古さを指摘する。「大きな魚の背に乗ってきた男」は、『宇治拾遺物語』に始まり、「鮎の大助」「饅に助けられた話」と南下し、台湾の事例をも挙げて、説話の起源の古さを指摘する。「大きな魚の背に乗ってきた男」という視点が、これら的话を貫くことはよくわかる。こうした分析は、現在では、研究者が分化してしまった説話と昔話のそれぞれに向かって、風穴を開ける試みとしても、重要であろう。

3章は、寺田寅彦のほとぎすの鳴き声の聞きなしに始まり、菅江真澄「はしわのわからば」から古典の事例を経て、『遠野物語』まで及ぶ。「聞きなし」という視点から読もう

といふ提示は、日本古典の研究でも言われはじめたことだが、たいへん新鮮に思われる。その結論としては、凄惨な死をとげた若者た

ちへの「鎮魂の賦」であるという読みを提示する(一二七頁)。

成」の段階でこれを取り入れた。その際にも、関の増補を助けた著者の問題意識が影響したのではないかと想像される。ここでは、その

4章は、一言で言えば、「鼠の嫁入り」の比較研究ということになる。『沙石集』『パンタチャントラ』に始まり、アイヌの「カムイユウカル」、そして、中国の民間故事へと展開する。末尾に、中国の剪紙と木版年画を挙げ、1章と同様、図像に関する資料の重要性が明らかにされる。この章もまた、アジアに

広がる昔話の実態を示していく、尽きぬ興味を刺激する。日本における『応諧錄』の享受について、『巷談奇叢』(一六三頁)への言及も必要だろうし、まずは『浮世床』を指摘しておく必要があつただろう。

5章は、「田螺と鳥の歌問答」と呼ばれる話について、歌をかけあう主人公たちが変化

しておくる必要があつただろう。

6章は、『グリム童話』を採り、折口の理論の検討を経て、新潟県の事例から、それから物語を読む』でも一章設けて論じ、『鄙の文芸であり、幻のテキストを相互に確認してゆくものであるにもかかわらず、話が改変される場合があり、その事例としてこの話を挙げている。

7章は、百物語の「法式」を探り、折口の理論の検討を経て、新潟県の事例から、それから物語を読む』でも一章設けて論じ、『鄙の文芸であり、幻のテキストを相互に確認してゆくものであるにもかかわらず、話が改変される場合があり、その事例としてこの話を挙げている。

8章は、百物語の「法式」を探り、折口の理論の検討を経て、新潟県の事例から、それから物語を読む』でも一章設けて論じ、『鄙の文芸であり、幻のテキストを相互に確認してゆくものであるにもかかわらず、話が改変される場合があり、その事例としてこの話を挙げている。

9章は、グリム童話がどのようにして定着したかを論じる。具体的に挙げているのは、が予祝儀礼であった、と導き出す。しかし、その結論としては、凄惨な死をとげた若者た

あつた。途中、問題にしている森鷗外『百物語』は、森銑三に考証がある。私自身は、明治の風俗、とりわけ文化人たちの怪談ブームの中でとらえる見方もあるのではないかと考えている。

本書は概ね、冒頭に述べられた柳田理論に対する批判の趣をなし、各章で立ち上げた問題提起はそれをしなやかに越えてゆく試みとしてある。戦後の昔話研究における第二世代を形成した一人、著者ならではの世界が、確固たるものとして存在している。二一世紀へ向けて、昔話の面白さと昔話研究の可能性を開いてくれる、橋渡しとなる本であることは間違いかろう。

その際に、この本で積極的に持ち込んだのは、折口理論ではなかつたか。1章の「山中異童子の賣姿」(六四頁)、3章の「安らぎを得ぬ未完成靈」(一二七頁)、8章の「非業の死を遂げた者への積極的な慰藉」(二九〇頁)といった重要な読みは、はつきり名前の出ていない場合もあるものの、そこに影を落とすのが折口であることは自明だろう。しかし、私には、昔話の読み取りと折口理論との間に、やはり間隙があるように思われてな

らない。もう少しそこを埋める言葉がほしいと思つた。

この本の充実した意義を認めつつも、なお申し上げたいいくつかの点には、誤解もあり、無い物ねだりもあるかもしれない。だが、遙かに遅れてきた後学世代の一人としては、違和感を隠さずに読みぬきたいといふ、切実な

思ひがある。昔話研究の大きな転換期にあって、そうした嘗みをゆるがせにしたところから、次の新しい研究は始まらない。そう思われるからだ。著者ならばに読者には、ご寛容のものでこれをお読みください幸いである。

(大修館書店・本体二五〇〇円)

書評

石井正己著

『絵と語りから物語を読む』

根岸英之

II

本書は、口承文芸分野において柳田国男を

初めとする昔話資料集の「文献学的研究」を精力的に進めている石井正己氏が世に問うた最初の単著である。一九八八年から九年までに既発表論文と書き下ろし論文から成る。

III

目次の構成は以下の通り。

さかさ語り論

琵琶法師と犬—琵琶法師の図像学(1)—

琵琶法師の演唱—琵琶法師の図像学(2)—

胡弓を弾く盲僧

能の語りと伝説

庄内の鳥羽絵

サムトの婆の来る家

山口孫左衛門家の盛衰

あとがき

『源氏物語』の世間話

『源氏物語絵巻』の宇宙

『宇治拾遺物語』にみる昔話の論理